

## 2022（令和04）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2023（令和4）年5月19日

代表者 野本 禎司

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	和文）仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究 英文）A Comprehensive Study of the Ruling Structure and Policy Making in the Sendai Domain			
研究期間	2022（令和4）年度 ～ 2023（令和5）年度（2年間）			
研究領域	（D）自然・文化遺産の保全と継承			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	野本 禎司	東北アジア研究センター・助教	歴史学、日本政治史	研究代表者
	荒武 賢一郎	東北アジア研究センター・教授	歴史学、日本経済史	研究分担者
	松本 剣志郎	法政大学文学部・准教授	歴史学、日本都市史	研究分担者
	萱場 真仁	徳川林政史研究所・研究員	歴史学、日本林政史	研究分担者
	吉川 紗里矢	税務大学校租税資料室・研究調査員	アーカイブズ学、文書管理史	研究分担者
	大鋳地 駿佑	中央大学大学院文学研究科・博士後期課程	歴史学、日本災害史	研究分担者
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 296,233 円		
	外部資金（科研・民間等）		[小計]	
	合計金額	296,233 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 （600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。）	<p>東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門（以下、上廣部門）が展開する歴史資料保全活動では、県内各所に所在する仙台藩家臣の歴史資料の調査を積極的に進めている。その成果については、資料翻刻を収録した報告書の刊行や資料画像のウェブ公開などにより、その活用も促進を図ってきた。本共同研究では、こうして新たに活用可能となった仙台藩の家臣資料をはじめ、博物館・図書館などに保管される歴史資料をあわせることにより、これまで後年の歴史書に頼らざるをえず、実証的研究が皆無に近いと指摘されてきた仙台藩の官僚的組織を明らかにすることを目的としている。近世日本では官僚的組織を武士が構成していたため、仙台藩家臣の資料分析が進めることは有効な手段である。また、東北地方にあって最大規模の大名として江戸幕府に大きな影響を与え続けた仙台藩において、本研究課題を追究することは、日本近世史研究の進展においても重要な意味を有している。</p> <p>本年度は、①上廣部門の調査成果（資料画像データ、文書目録）の共有、②東北歴史博物館、宮城県図書館、宮城県公文書館所蔵の歴史資料調査の実施、内容共有をおこない、研究共通基盤を整備した。③研究会議を2回開催し（2022年11月・2023年2月、於東北大学）、第2回会議では、各自が使用する歴史資料をもとに実証的研究報告をおこない、共同研究のまとめ方の方向性を具体的に討議した。結果、それぞれの専攻分野（政治史、経</p>			

	<p>済史、都市史、林政史、文書管理史、災害史)を活かして仙台藩の官僚組織を各レベルから多角的にアプローチしつつも、研究対象時期を絞り込むことで論点を明確にした。この会議では組織外から阿部弘樹氏(岩出山古文書を読む会会員)に参加をいただき、地域史研究の立場からのコメントをうけ、本共同研究の意義を深めることができた。</p> <p>研究発信として、①専門分野を活かした研究発表を学会・市民講座等で行うとともに、②仙台藩の伊達家譜代家臣・後藤家文書の資料集として報告書を刊行(『仙台藩宿老後藤家文書—由緒・職務・武芸—』(東北大学東北アジア研究センター叢書第72号)、③上廣部門ホームページ・デジタルコレクションに仙台藩士・奥山家文書の資料画像を公開することができた。</p>		
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	<p>東北アジアの政治体制において官僚的組織は役人が担うことが多いが、近世日本においては、武士が官僚的組織を担う特徴がある。この実態を明らかにすることは、近世日本の政治体制の固有性の理解を深めるだけでなく、東北アジアにおける政治体制の研究に対しても資するところがある。</p>		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など： 2回	国際会議： 0回	
	研究組織外参加者(都合)： 1人	研究組織外参加者(都合)： 0人	
研究成果	学会発表(4)本	論文数(0)本	図書(2)冊
専門分野での意義	[専門分野名] 歴史学、日本近世史	[内容] 未発掘の歴史資料の活用から導き出される新たな歴史像の構築	
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数:[2] 分野名称[歴史学、アーカイブズ学]	
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有]	[内容] 未公開資料の報告書刊行、資料画像のウェブ公開をおこなうことで、社会における活用を可能にし、調査・研究成果を還元している。	
国際連携	連携機関数： 0	連携機関名：	
国内連携	連携機関数： 3	連携機関名： 法政大学、徳川林政史研究所、税務大学校租税資料室	
学内連携	連携機関数： 0	連携機関名：	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数： 1	参加学生・ポスドクの所属：中央大学大学院文学研究科博士後期課程	
第三者による評価・受賞・報道など	なし		
研究会計画全体の中での当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本年度は、共同研究組織内での共通基盤の整備と、資料保存公開施設での関連資料調査内容の共有、これらをもとにしたメンバー各自の実証的研究報告による成果論集のまとめ方の共通認識を形成することを計画しており、予定通り進めることができた。次年度は、研究成果のパネル展示(2023年11月、仙台市営地下鉄東西線国際センター駅構内予定)を開催して社会還元をおこなうとともに、研究成果論集の原稿化を各自進め、研究会によりその内容を深化させることで、歴史学およびアーカイブズ学研究において意義ある成果をまとめられるよう進めたい。</p>		
最終年度	該当 [無]		

**本共同研究に関わる業績（発表予定含む）**

## [学会発表]

- ・大銚地駿佑「近世における世襲的中间支配機構と領主役人・地域社会—仙台藩の大肝入制を事例に—」（中央史学会第47回大会、オンライン、2022年7月2日）
- ・荒武賢一朗「幕末期における商人の「領主御用」と「献金」—白石・渡辺家文書の考察から—」（宮城歴史科学研究会2022年大会、オンライン、2022年9月19日）
- ・大銚地駿佑「近世後期藩領における領主的業務の委任と地域社会—仙台藩領気仙郡を事例に—」（東北史学会2022年度大会、岩手大学E31講義室／オンライン併用、2022年10月2日）

## [雑誌論文]

## [その他]

## (図書)

- ・野本禎司・南郷古文書を読む会編『仙台藩宿老後藤家文書—由緒・職務・武芸—』（東北大学東北アジア研究センター叢書第72号、2023年1月）
- ・荒武賢一朗・白石古文書の会編『白石片倉家中 佐藤家文書—宮城県蔵王町・近世在郷武士の記録を読む—』（東北アジア研究センター叢書、2023年度刊行予定）

## (講演)

- ・野本禎司「仙台下川内武家屋敷の特徴—住環境と重臣層に着目して—」（仙台藩志会伊達学塾、エル・パーク5Fセミナーホール、2022年4月23日）
- ・荒武賢一朗「幕末期における大河原町の社会状況—大肝入の仕事と「自治」組織—」（大河原町文化財講演会、大河原町中央公民館大ホール、2022年10月23日）
- ・荒武賢一朗「幕末期における商家経営と人的諸関係」（上廣歴史・文化フォーラム「多面性を持つ近世白石商人—渡辺家文書の調査から—」、白石市中央公民館大ホール、2023年2月11日）
- ・野本禎司「天保期の渡辺家と片倉家・仙台藩」（上廣歴史・文化フォーラム「多面性を持つ近世白石商人—渡辺家文書の調査から—」、白石市中央公民館大ホール、2023年2月11日）

## (資料画像デジタル公開)

- ・加美町奥山家文書（上廣歴史資料学研究部門ホームページ・デジタルコレクション、2022年12月23日公開）

<https://uehiro-tohoku.net/digital-collection>

\*ファイル名は KyodoRpt\_年度\_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に1, 2と記入する（例 KyodoRpt\_2013\_oka1）。